

契沖の解釈の事例

実際、契沖による「歌」の理解は、古の人の言葉を聴取するように行われた。その事例を見てみよう。

契沖は「初稿本」から「精撰本」への改稿のプロセスを通じて解釈 *interprétation* を深化させているのであるが、そのことを通じて契沖の「耳」はより古代人の「声」によりそった聴き方をしようとしている。そのことを示す事例を見てみよう。

児等手乎卷向山者常在常過往人尔往卷目八方（巻7・1268）

卷向之/山邊響而/往水之/三名沫如/世人吾等者（同・1269）

右二首柿本朝臣人麻呂之歌集出

【訓読】

児等が手を巻向山は常にあれど過ぎにし人に往きまかめやも（1268）

巻向の山辺響みて往く水の水沫のごとし世の人吾等は（1269）

右の二首は柿本朝臣人麻呂歌集に出づ。

【現代語訳】

いとしい子の手を枕とするという名の巻向山は昔と変わらずにあるけれど、去って行ったあの人の所に行って、手枕にすることはできない。（1268）

巻向山の山辺を鳴りとよもして流れて行く川の水面に浮かぶ沫のようなものだ。現世に生きているわたしたちは。（1269）

右の二首は、「柿本朝臣人麻呂歌集」が出典である。

1269 歌について『代匠記』初稿本は、「三名沫如（水沫のごとし）」という句について「水のあはのことしなり」と説明して、その後で「人麿の哥に、惣して無常を觀したる哥おほし。大権の聖者にて和光同塵せるなるへし」（人麻呂の歌には、総じて、無常觀の歌が多い。人麻呂は菩薩の化身として衆生の中に生まれたのに違いない）と説明している。

ところが、精撰本では、「サキノ哥ハ他ノ上ヲ云ヒテ、此哥ハ自ノ上ヲ省ルナリ。人丸ハヨク無常

ヲ観シタル人ナリ」(前の歌[1268]は他者の身の上のことを述べていて、この歌[1269]は自己を省みているのだ。人麻呂は無常というものを深く観想かんそうしていた人であるのだ)と改稿かいこうしている。この改稿はいかなる読みの深化をもたらしているだろうか。

精撰本の契沖は、前の歌(1268)が他者の身の上の無常をいったものであり、後の歌(1269)が自らの身の上の無常をいったものであるとして、2首で一對いっついに捉えとらえられることを述べた上で、「人丸ハヨク無常ヲ観シタル人ナリ」と述べている。契沖は、2首を「連作」と捉えている。これは初稿本にはない視点である。

この初稿本から精撰本への改稿は次のような問題を提起している。

つまり、精撰本では、作者・人麻呂は他者の身の上の無常に対する気づきを歌った上で自己の身の上の無常を観ている、と捉えているのである。だからこそ、契沖は、作者・人麻呂を「ヨク無常ヲ観シタル人」だと言うわけである。精撰本はそういう論理になっている。

歌の解釈(サキノ哥ハ他ノ上ヲ云ヒテ、此哥ハ自ノ上ヲ省ルナリ)

↓

作者の思想についての考察(人丸ハヨク無常ヲ観シタル人ナリ)

たしかに、初稿本においても「惣して無常を観したる哥おほし」(人麻呂には総じて無常を観じた歌が多い)と述べてはいる。しかし、それは、人麻呂の歌についての一般論として言われているのであって、歌に即した聴き方にはなっていないのである。

そのうえ、初稿本には、いかにも真言宗の阿闍梨らしい言い方で、人麻呂を「大権の聖者にて和光同塵せるなるへし」と讃えている。つまり、人麻呂は菩薩の化身として俗界に生まれた聖者だと言っているのである。

これは歌の解釈とは別の問題を提起している。テキストの文言に即した忠実な解釈を旨とする契沖にあって、これは、興味深い事例と言えるかもしれない。つまり、初稿本では、仏教的形而上学が顔を出しているのである。

ところが、精撰本ではそれが完全に削除される。そして、歌の解釈から作者についての批評へと論理的に展開する行文に改められているのである。

初稿本から精撰本への改訂は、本文校訂をより厳密にしてほしいという水戸家からの要望によって起

動したものであるが、契沖は、その改稿過程を通じて、作品に即した読みから出発して作者の思想について述べるという行き方をより徹底させることにしたのである。

さらに次のことも注意されるだろう。

実は、1269 歌の第四、五句「三名沫如世人吾等者（水沫のごとし世の人吾等は）」については、仏典に広く見出すことのできる「是身如泡沫」（この身は泡沫の如し）「是身如聚沫」（この身は聚沫の如し）といった出典を指摘することができる。例えば、『維摩詰所説経』「方便品第二」に「是身無常、（・・・）是身如聚沫。不可撮摩。是身如泡。不得久立」とあるが、契沖はそれを指摘しようとはしない。契沖は『維摩経』についてはよく知っていて、「日本挽歌」の前文に関しては詳細に注記している。

結論から言えば、契沖は、出典の指摘が作品の内的な論理を解明することに役立たない場合には指摘しない。実際、他の「人麻呂歌集歌」では『金光明経』や『涅槃経』の典拠を指摘しているが、ここでは仏典の典拠を指摘することが作品の解釈にとって有意義ではないものと判断されたのだと推測される。つまり、契沖は、出典をつなげ合わせて歌ができるとは考えていない、あるいは、そういう出典論を峻拒さえしたのである。なるほど人麻呂は仏典の文言をよく知っていたし、また、その思想に近い歌を詠んでもいる。しかし、「巻向の山辺響みて往く水の水沫のごとし世の人吾等は」という歌の「水沫」という語を解釈する際に仏典を引用することを避けたのである。

ここには、契沖の出典論についての思想が沈黙とともに読み取られるだろう。巻向の山々は、人麻呂の若き日の妻のいた地であり、また、その自然詠をはぐくんだ地でもある。そうすると、人麻呂にとっては、巻向の風土があって初めて「巻向の山辺響みて往く水の水沫のごとし」という表現が生成したというべきであって、巻向川をじっと見つめることのなかに、人麻呂の無常観はあったわけである。

それは、文言の上では仏典語と一致はしていても、人麻呂だけの無常観に違いない。それは、歌を作ることとともに切り拓かれ、産み出されたものだ。彼の目と耳と心とがいっしょに働いて感じられることによって生まれた言葉がそこにあるということだ。

契沖は、そこまで古代人の声を聴取しているのである。

2020年3月31日 研究代表者 西澤 一光